国際文化学部論集　第13巻 第３号（2012年12月）

「ひとつひとつ」「ひとりひとり」の仮名交じり表記について

外　薗　幸　一

0. インターネット上での議論

近年，インターネット上で，「ひとつひとつ」の書き方について，「一つ一つ」「一つひとつ」「ひとつひとつ」のどれが最も適切であるか。また，「ひとりひとり」の書き方について，「一人一人」「一人ひとり」「ひとりひとり」のどれが適切であるかについて質問がなされ，それに対する回答や解説をめぐって色々な議論がなされている。

例えば，「横書きの文章を書くとき，『ひとつひとつ』という言葉はどのように表記するのが一般的なのでしょうか？『１つ１つ』『ひとつひとつ』『一つ一つ』・・・いろいろ頭に浮かぶのですが」という質問があり，それに対して，「『ひとつひとつ』『一つ一つ』『一つひとつ』のいずれも可能です」とか，「『１つひとつ』は好ましくない表記であり，『一つひとつ』が読みやすい」というような回答がなされている。また，「『一つひとつ』と，どうして前は漢字で書くのか」という質問に対して，「漢字ではじまり平仮名で終わる表記が，日本語として読みやすいということだ」という回答がなされている。

「ひとりひとり」についても，同じような質問や回答が見受けられる。例えば，「『ひとりひとり』を表記する場合，①一人ひとり，②一人一人，③一人々，のどれが日本語的に正しいのか」という質問があり，それに対して，「『一人々』は誤りであるが，『一人一人』『一人ひとり』『ひとりひとり』のどれでもいい」という回答がなされている。

なお，各表記の使用頻度に関して，google 検索による次のようなデータも掲載されている。

・一人ひとり…469万件

・一人一人…452万件

・ひとりひとり…199万件

・ひとり一人…21万件

〈http://okwave.jp/qa/q2341564.html〉（投稿日時2006/08/15）

キーワード：ひとつひとつ，ひとりひとり，ひとつびとつ，ひとりびとり，仮名交じり表記

1.「ひとつひとつ」の表記法について

1-1.「ひとつひとつ」の用例

上述のごとく，「ひとつひとつ」についても主に三種類の書き方があるが，日本語の伝統的表記法に照らしてみた場合，どの書き方が最も望ましいのか。また，その書き方や発音は，どのように変化してきているのか。そのような観点から，まず，筆者の勤務する大学図書館に所蔵する古語・国語辞典類を調査してみたところ，次のような結果が得られた。

古語・国語辞典類における「ひとつひとつ」の用例

註１．注意すべき個所や出版年にほどこしてある下線は筆者が引いたものである。
註２．＊印のあとに太字で書いてある部分は筆者が挿入した補足である。

(1)「ひとつびとつ（一一）」とするもの

①飛田良文他編（2009）『明治期国語辞書体系［普20］　辞林　四十四年版』（東京，大空社）
ひとつびとつ（一一）（副）　ひとつ毎に。いちいち。

②上田萬年・松井簡治著（昭和27年；1952）『修訂　大日本國語辭典　新装版』（東京，冨山房）
ひとつびとつ　一一（副）　ひとつごとに。いちいち。蜻蛉日記下下「ひとつびとつをだに，なす事にし侍らん」

③金田一京助編（昭和29年；1954）『辞海（縮刷版）』（東京，三省堂）
ひとつびとつ（一一）（名）　それぞれみな。いちいち。

④大槻文彦著（昭和31年；1956）『新訂大言海』（東京，冨山房）
ひとつびとつ（副）（一一）　一ツ毎ニ。一一（イチイチ）。蜻蛉日記，下，下「ひとつびとつヲダニ，ナス事ニシ侍ラン，カヘリミサセ給ヘトイヒテ」「ひとつびとつシラベル」

⑤大槻文彦・大槻清彦著（昭和57年；1982）『新編大言海』（東京，冨山房）
ひとつびとつ（副）（一一）　一ツ毎ニ。一一（イチイチ）。蜻蛉日記，下，下「ひとつびとつヲダニ，ナス事ニシ侍ラン，カヘリミサセ給ヘトイヒテ」「ひとつびとつシラベル」

⑥金田一京助編（昭和49年；1974）『辞海（新装）』（東京，三省堂）
ひとつびとつ（一一）（名）　それぞれみな。いちいち。

(2)「ひとつびとつ（一つ一つ）」とするもの

①新村出編（昭和24年：1949）『言林』（東京，全国書房）
ひとつびとつ（一つ一つ）（副）　一つ毎に。いちいち。

②福原鱗太郎・山岸徳平主幹（昭和27年；1952）『研究社　国語新辞典』（東京，研究社辞書部）
hitotsubitotsu 一つ一つ（副）　いちいち．［one by one］

③新村出編（昭和30年；1955）『広辞苑』（東京，岩波書店）

ひとつびとつ【一つ一つ】（副）一つごとに。いちいち。

④金澤庄三郎編（昭和33年；1958）『新版　広辞林』（東京，三省堂）

ひとつびとつ（一つ一つ）（副）　ひとつごとに。いちいち。

⑤新村出編（昭和36年：1961）『言林』（東京，小学館）

ひとつびとつ（一つ一つ）㊐　一つごとに。いちいち。

⑥久松潜一監修（昭和40年；1965）『新潮国語辞典　―現代語・古語―』（東京，新潮社）

ひとつびとつ【一（つ）一（つ）】（副）それぞれみな。いちいち。「― をだになすことにし侍らん〔蜻蛉下・天延二〕」　＊「――」と「一つ一つ」の両用を認めている。

⑦三省堂編修所（昭和42年；1967）『三省堂　新国語中辞典』（東京，三省堂）

ひとつびとつ（一つ一つ）（副）　ひとつごとに。いちいち。

⑧旺文社編／守随憲治・今泉忠義監修（1970）『旺文社　国語辞典』（東京，旺文社）

ひとつびとつ（一つ一つ）　いちいち。ひとつごとに。

⑨久松潜一監修（昭和57年；1982）『新装改訂　新潮国語辞典　―現代語・古語―』（東京，新潮社）

ひとつびとつ【一（つ）一（つ）】（副）それぞれみな。いちいち。「― をだになすことにし侍らん〔蜻蛉下・天延二〕」

⑩三省堂編修所（1983）『広辞林〈第五版〉』（東京，三省堂）

ひとつびとつ（一つ一つ）ひとつごとに。いちいち。

⑪新村出編（昭和44年～平成20年；1969～2008）『広辞苑　第二～六版』（東京，岩波書店）

ひとつびとつ【一つ一つ】副　一つごとに。いちいち。

(3)「一つ一つ（――）」に「ひとつひとつ」「ひとつびとつ」の両方の読み方を示すもの

①時枝誠記編著（昭和31年；1956）『例解国語辞典』（東京，中教出版株式会社）

ひとつひとつ【一つ一つ】（体）　いちいち。一つごと。みな。「― について詳しく検査する」「― 丁寧に見直す」

ひとつびとつ【一つ一つ】（体）→ひとつひとつ【一つ一つ】

②松村明監修（昭和48年；1973）『用字用語　新表記辞典』（東京，第一法規出版）

ひとつひとつ　一つ一つ・ひとつひとつ　例 ～ 丁寧に調べる。　注「ひとつびとつ」とも言う。和語の副詞は，仮名でも書く。

③藤原与一他編（昭和60年；1985）『表現類語辞典』（東京，東京堂出版）

ひとつびとつ　一つ一つ〔副〕〈ひとつひとつ〉とも言う。多数のものを各個に（一つごとに）取り上げて，そのすべてに及ぶ場合に使う。「梨は一つ一つ丁寧に紙に包まれていた。」

④見坊豪紀〔主幹〕他編（1982）『三省堂国語辞典　第三版』（東京，三省堂）

ひとつひとつ【一つ一つ】（名）多くのものの，それぞれ。ひとつびとつ。「思い出の ― が目に浮かぶ」

⑤見坊豪紀〔主幹〕他編（2002）『三省堂国語辞典　第五版』（東京，三省堂）

ひとつひとつ【一つ一つ】（名）多くのものの，それぞれ。ひとつびとつ。「思い出の ― が目に浮（ウ）かぶ」

⑥金田一京助他編／山田忠雄〔主幹〕（1991）『新明解国語辞典　第四版』（東京，三省堂）

ひとつひとつ【一つ一つ】（副）どの一つをとってみても，例外無くそうであることを表わす。ひとつびとつ。

⑦日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2001）『日本国語大辞典第二版　第十一巻』（東京，小学館）

ひとつひとつ【一一】〔名〕（「ひとつびとつ」とも）それぞれの事や物。いちいち。また，副詞的に用いる。ひとつごとに。

(4)「ひとつひとつ（一つ一つ）」とするもの

①西尾実他編（1971）『岩波国語辞典　第２版』（東京，岩波書店）

ひとつひとつ【一つ一つ】いちいち。ひとつずつたんねんに。「― 調べあげる」

②三省堂編修所（昭和48年；1973）『用字用語必携〈第五版〉』（東京，三省堂）

ひとつひとつ【一つ一つ】

③金田一春彦・池田弥三郎編（昭和53年；1978）『学研国語大辞典』（東京，学習研究社）

ひとつひとつ【一つ一つ】《名》（多くある物の）それぞれ。一つずつ。「― に思い出がある」「― 手にとって見る」

④尚学図書編（昭和56年；1981）『国語大辞典』（東京，小学館）

ひとつひとつ【一つ一つ】それぞれの事や物。いちいち。また，副詞的に用いる。ひとつごとに。

⑤西尾実他編（1986）『岩波国語辞典　第４版』（東京，岩波書店）

ひとつひとつ【一つ一つ】いちいち。ひとつずつ丹念に。「―（を）調べあげる」

⑥三省堂編修所（1987）『大きな活字の漢字表記辞典　第二版』（東京，三省堂）

ひとつひとつ【一つ一つ】

⑦大野晋・浜西正人著（昭和60年；1985）『類語国語辞典』（東京，角川書店）

ひとつひとつ【一つ一つ】 ①果物を― 箱に詰める。― よく観察する。それぞれ。② ― よい出来だ。多くのあるものの，それぞれ。みんな。③ ― 丁寧に取り出す。― 検討する。すべてにわたって念入りに。

⑧金田一京助・佐伯梅友他編（1987）『新選国語辞典　第六版』（東京，小学館）

ひとつひとつ【一つ一つ】名 副 たくさんのものの，それぞれ。一つごとに。いちいち。

⑨金田一京助・佐伯梅友他編（1994）『新選国語辞典　第七版』（東京，小学館）

ひとつひとつ【一つ一つ】名 副 たくさんのものの，それぞれ。一つごとに。いちいち。

⑩梅棹忠夫他監修（1989）『講談社カラー版　日本語大辞典』（東京，講談社）

ひとつひとつ【一つ一つ】（名・副）いちいち。みな。one by one

⑪森岡健二他編（1993）『集英社　国語辞典』（東京，集英社）

ひとつひとつ【一つ一つ】〔名・副〕（たくさんある物の）それぞれ。また，一つごとに。一つずつ。どれもこれも。「— 確認する」「— 胸をうつ話だ」

⑫梅棹忠夫他監修（1995）『講談社カラー版　日本語大辞典　第二版』（東京，講談社）

ひとつひとつ【一つ一つ】（名・副）いちいち。みな。one by one 用例 — 確かめる。

⑬松村明・三省堂編修所（1995）『大辞林　第二版』（東京，三省堂）

ひとつひとつ【一つ一つ】多くのものの，それぞれ。いちいち。一つずつ。どれもこれも。「— 点検する」「— 問題を解決していく」

⑭田 忠魁 他編著（1998）『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』（東京，研究社出版）

一つ一つ（ひとつひとつ）：どの一つを取り上げても，どれにも例外のない様子。

＊いちいち：一つの例外もなく，すべてについて問題にする様子。

【例】一つ一つの説明は結構だけど，いちいち「分かる？」って聞くんだよ。

⑮柴田武・山田進編（2002）『類語大辞典』（東京，講談社）

【一つ一つ　ひとつひとつ】それぞれのもの「これらのトロフィーには，～に思い出がある」「～ていねいに焼き上げた陶器」

(5)「ひとつひとつ」を採録していないもの

①野間光辰監修（昭和38年；1963）『新辞源』（大阪，保育社）

②中田祝夫編（昭和38年；1963）『新選古語辞典』（東京，小学館）

③旺文社（昭和40年；1965）『旺文社　古語辞典』（東京，旺文社）

④金田一春彦・三省堂編修所編（1977）『新明解古語辞典　第二版』（東京，三省堂）

⑤金田一京助・佐伯梅友他編（昭和49年；1974）『新選国語辞典（新装）』（東京，小学館）

⑥松村明・三省堂編修所（1988）『大辞林』（東京，三省堂）

以上の調査結果から，次のようなことが言える。

i．表記法としては，「一一」「一つ一つ」の二種類があるが，「一一」は古い用法であり，「一」を「ひとつ」と読むのは常用漢字音訓外であるから，現代語としては「一つ一つ」と書く。

ii．発音は，古くは「ひとつびとつ」であったが，次第に「ひとつひとつ」という読み方が主流になり，現代語としては「ひとつひとつ」と読む。ただし，日本語辞典として最も権威のある『広辞苑』では，第六版（2008年刊行）でもなお「ひとつびとつ」だけを採用し，「ひとつひとつ」の読み方を挙げていない。

iii．品詞としては，副詞とするものが多いが，名詞とするものもあり，その両用が認められる。

iv．「ひとつひとつ」を用語として採録していない辞典も少なくない。その理由は，この用語が「ひとつ」（一つ）の繰り返しであるから，「ひとつ」だけを用語として解説すれば，その畳語である「ひとつひとつ」を改めて採りあげる必要はない，という考え方によるものと思われる。

1-2. 現代語における表記法

ところで，上記のように，「ひとつひとつ」の書き方としては「ひとつひとつ」「一つ一つ」「一つひとつ」の三種類があるとされる。「ひとつひとつ」はすべてを平仮名で書き，「一つ一つ」は漢字で表記したものであるが，最後の「一つひとつ」は漢字と平仮名を交ぜたものである。なぜこのような書き方が用いられるようになったのかという問題は，なぜ「ひとりひとり」に「一人ひとり」という表記が用いられるのか，という問題と同根であると考えられる。両者には，「ひとつびとつ」「ひとりびとり」という畳語連濁の問題も共通している。どちらも古くは濁音を含む用語であったにもかかわらず，現代語としては清音のみで発音されている。連濁を含む表記としては，「一つびとつ」「一人びとり」という書き方も考えられるが，そのような表記は，現代語ではほとんど目にすることがない。

ともあれ，「一つひとつ」の表記に対しては，連濁の問題を含めて，後述する「一人ひとり」の表記についての考察を類推によって充当することが可能であると思われるので，ここでは，新聞誌上に見られる「ひとつひとつ」の用例をデータとして提供するにとどめる。

2012年４～５月の『南日本新聞』と『朝日新聞』の二誌に見られた用例

(1) 一つ一つ

・一つ一つの文章に感動する
・一つ一つの積み重ねが大切だ
・一つ一つ課題をクリアする
・一つ一つ作業を進める
・主人公の一つ一つの心情に寄り添う
・一つ一つの色に命がある
・努力を一つ一つ積み重ねていく
・問題を一つ一つ片づけていく
・彼の功績の一つ一つが大きい
・案内文を一つ一つ手書きする
・一つ一つの大会で結果を出す

(2) ひとつひとつ

・石をひとつひとつ拾い集める

・歌曲のひとつひとつが心を打つ

(3) 一つひとつ

・壁を一つひとつなくしていく

以上のように，現在では「一つ一つ」という表記が圧倒的に多い。

2.「ひとりひとり」の表記法について

2-1.「ひとりひとり」の用例

上述のごとく，「ひとりひとり」についても，主に三種類の書き方（「ひとりひとり」「一人一人」「一人ひとり」）がある。日本語の伝統的表記法に照らしてみた場合，どの書き方が最も望ましいのか。また，その書き方や発音は，どのように変化してきているのか。「ひとつひとつ」の場合と同様に，筆者の勤務する大学図書館に所蔵する古語・国語辞典類を調査してみたところ，次のような結果が得られた。

古語・国語辞典類における「ひとりひとり」の用例

(1)「ひとりびとり（一人一人）」で「どちらか一人」の意味とするもの

①中田祝夫編（昭和38年；1963）『新選古語辞典』（東京，小学館）

ひとりびとり【一人一人】（名）どちらか一人。だれか一人。「右の大臣も，あまたものし給ふ御むすめたちを，— はと心ざし給ひながらえ言に出で給はず」〈源・匂宮〉。

②旺文社（昭和40年；1965）『旺文社　古語辞典』（東京，旺文社）

ひとりびとり【一人一人】（名）いずれかひとり。だれかひとり。「御むすめ達を，— はと心ざし給ひながら」〈源・匂宮〉

③金田一春彦・三省堂編修所編（1977）『新明解古語辞典　第二版』（東京，三省堂）

ひとりびとり【一人一人】（名）どちらか一人。だれか一人。「思ふどち — が恋ひ死なば，誰によそへて藤衣着む」〔古今・恋三・六五四〕

(2)「ひとりびとり（一人一人）」で「ひとりずつ。各人。めいめい」の意味とするもの

①飛田良文他編（2009）『明治期国語辞書体系［普20］　辞林　四十四年版』（東京，大空社）

ひとりびとり（一人一人）（副）　ひとりづつ。ひとりごとに。

②新村出編（昭和24年：1949）『言林』（東京，全国書房）

ひとりびとりに（一人一人に）（副）　ひとりずつ。その人ごとに。各人に

③福原鱗太郎・山岸徳平主幹（昭和27年；1952）『研究社　国語新辞典』（東京，研究社辞書部）

hitoribitori 一人一人（副）　めいめいに．各自．［one by one］

④金田一京助編（昭和29年；1954）『辞海（縮刷版）』（東京，三省堂）

ひとりびとり（一人一人）（名）　めいめいの人。各人。

⑤金澤庄三郎編（昭和33年；1958）『新版　広辞林』（東京，三省堂）

ひとりびとり（一《人一《人）（副）　ひとりずつ。ひとりごとに。

＊「人（り）」が当用漢字音訓外であることを示している。

⑥新村出編（昭和36年：1961）『言林』（東京，小学館）

ひとりびとりに（一人一人に）㊐　ひとりずつ。その人ごとに。各人に

⑦野間光辰監修（昭和38年；1963）『新辞源』（大阪，保育社）

ひとりびとり【一△人一△人】名 副 ひとりずつ。その人ごと。

⑧久松潜一監修（昭和40年；1965）『新潮国語辞典　―現代語・古語―』（東京，新潮社）

ひとりびとり【一《人一《人】（副）めいめいの人。各人。〔源・若菜上〕

⑨三省堂編修所（昭和42年；1967）『三省堂　新国語中辞典』（東京，三省堂）

ひとりびとり（一《人一《人）（副）　ひとりずつ。ひとりごとに。

⑩金田一京助編（昭和49年；1974）『辞海（新装）』（東京，三省堂）

ひとりびとり（一人一人）（名）　めいめいの人。各人。

⑪金田一京助・佐伯梅友他編（昭和49年；1974）『新選国語辞典（新装）』（東京，小学館）

ひとりびとり【一△人一△人】名　①ひとりずつ。「― 呼び出す」②そのひとごと。めいめい。「― の覚悟」

⑫久松潜一監修（昭和57年；1982）『新装改訂　新潮国語辞典　―現代語・古語―』（東京，新潮社）

ひとりびとり【一人一人】（副）めいめいの人。各人。〔源・若菜上〕

⑬三省堂編修所（1983）『広辞林〈第五版〉』（東京，三省堂）

ひとりびとり（一《人一《人）副　ひとりずつ。ひとりごとに。

⑭三省堂編修所（1987）『大きな活字の漢字表記辞典　第二版』（東京，三省堂）

ひとりびとり【一人一人】

⑮森岡健二他編（1993）『集英社　国語辞典』（東京，集英社）

ひとりびとり【一人一人】〔名・副〕それぞれの人。各人。めいめい。

(3)「ひとりびとり（一人一人）」で「どちらか一人」と「ひとりずつ・各人」の意味を挙げるもの

①大槻文彦著（昭和31年；1956）『新訂大言海』（東京，冨山房）

ひとりびとり（名）（一人一人）何方ニモアレ，其内ニ一人。宇津保物語，菊宴廿三「ワレヒトリ，鶴ト松トヲ，見ルヨリモ，ひとりびとりハ，君ニトゾ思フ」源，三十四，上，若菜，上九十三「ひとりびとりツミナキ時ニハ，オノヅカラモテ直スタメシドモアルベカ

リメリ」

ひとりびとり－ニ（副）（一人一人）ヒトリゴトニ。一人ヅツニ。各人ニ。竹取物語「コノ人人ノ年月ヲ経テ，カウノミイマシツツ宣フ事ヲ思ヒ定メテ，一人一人ニアヒ奉リタマヒネトイヘバ」大和物語，中「ひとりびとりニ會ヒナバ，今ヒトリガ思ヒハタエナントイフニ」

＊名詞の場合と副詞の場合を分けている。

②大槻文彦・大槻清彦著（昭和57年；1982）『新編大言海』（東京，冨山房）

ひとりびとり（名）（一人一人）何方ニモアレ，其内ニ一人。宇津保物語，菊宴廿三「ワレヒトリ，鶴ト松トヲ，見ルヨリモ，ひとりびとりハ，君ニトゾ思フ」源，三十四，上，若菜，上九十三「ひとりびとりツミナキ時ニハ，オノヅカラモテ直スタメシドモアルベカメリ」

ひとりびとり－に（副）（一人一人）ヒトリゴトニ。一人ヅツニ。各人ニ。竹取物語「コノ人人ノ年月ヲ経テ，カウノミイマシツツ宣フ事ヲ思ヒ定メテ，一人一人ニアヒ奉リタマヒネトイヘバ」大和物語，中「ひとりびとりニ會ヒナバ，今ヒトリガ思ヒハタエナントイフニ」

③新村出編（昭和30年；1955）『広辞苑』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】①どちらか一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。

④新村出編（昭和44年；1969）『広辞苑　第二版』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】①どちらか一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。

⑤新村出編（昭和51年；1976）『広辞苑　第二版補訂版』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】①どちらか一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。

(4)「ひとりひとり」と「ひとりびとり」の用例を分けているもの

①上田萬年・松井簡治著（昭和27年；1952）『修訂　大日本國語辭典　新装版』（東京，冨山房）

ひとり ひとり　一人一人　どちらか一人。何れかひとり。竹取物語「思ひ定めて，ひとりひとりにあひ奉り給ひね」古今恋三「思ふどちひとりひとりが戀ひ死なば，誰によそへて藤衣きん」

ひとりびとり　一人一人（副）ひとりごと。ひとりづつ。各人。

＊「ひとり ひとり」と「ひとりびとり」を読み分けている。

(5)「一人一人」（ひとりびとり）であるが，「ひとりひとり」でも可とするもの

①尚学図書編（昭和56年；1981）『国語大辞典』（東京，小学館）

ひとりびとり【一人一人】（「ひとりひとり」とも）①どちらかひとり。だれかひとり。②一緒になっていた者が，ひとりずつに分かれること。③各人，めいめい。

②新村出編（昭和58年；1983）『広辞苑　第三版』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】（ヒトリヒトリとも）①どちらか一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。

③新村出編（1998）『広辞苑　第四版』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】（ヒトリヒトリとも）①どちらか一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。個人個人。

④新村出編（1991）『広辞苑　第五版』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】（ヒトリヒトリとも）①どちらか一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。個人個人。

⑤新村出編（2008）『広辞苑　第六版』（東京，岩波書店）

ひとりびとり【一人一人】（ヒトリヒトリとも）①どちらか一人。誰か一人。②ひとりずつ。その人ごと。各人。めいめい。個人個人。

⑥松村明・三省堂編修所（1988）『大辞林』（東京，三省堂）

ひとりびとり【《一人》《一人》】〔「ひとりひとり」とも〕①めいめい。各人「— の心掛けが大切だ」②どちらかひとり。だれかひとり。「思ふどち — が恋ひ死なば誰によそへて藤衣着む／古今恋三」　＊「一人」は常用漢字表の付表で認められた表記であることを示している。

⑦梅棹忠夫他監修（1989）『講談社カラー版　日本語大辞典』（東京，講談社）

ひとりびとり【一人一人】（名・副）＝ひとりひとり。①各自，めいめい。each 用例 — が努力する。②順にひとりずつ。one by one 用例 列の — に手渡す。

⑧梅棹忠夫他監修（1995）『講談社カラー版　日本語大辞典　第二版』（東京，講談社）

ひとりびとり【一人一人】＝ひとりひとり。①各自，めいめい。each 用例 — が努力する。②順にひとりずつ。one by one 用例 列の — に手渡す。

⑨日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2001）『日本国語大辞典　第二版　第十一巻』（東京，小学館）

ひとりびとり【一人一人】〔名〕（「ひとりひとり」とも）①どちらかひとり。だれかひとり。＊竹取（９ｃ末－10ｃ初）「思ひ定めてひとりひとりにあひ奉給ね」源氏（1001-14頃）若菜上「ひとりひとり罪なき時には，おのづからもてなす例どもあるべかめり」②一緒になっていたものが，ひとりずつに分かれること。＊多武峰少将物語（10ｃ中）「つねにおもひを，たきものの，ひとりひとりも，もえいでなまし」③各人，めいめい。＊五音曲条々（1429-41頃）「ひとりひとりの達声として，自他一音の曲道はあるべからず」

(6)「一人一人」（ひとりひとり）であるが，「ひとりびとり」でも可とするもの

①時枝誠記編著（昭和31年；1956）『例解国語辞典』（東京，中教出版株式会社）

ひとりひとり【一人一人】（体）①めいめい。各人。「— がしっかりやれば全体もよくなる」「これは—の責任だ」②順に一人ずつ。「— 名前を呼び上げる」「— に手渡しする」

ひとりびとり【一人一人】(体) →ひとりひとり【一人一人】

②金田一春彦・池田弥三郎編 (昭和53年；1978)『学研国語大辞典』(東京，学習研究社)

ひとりひとり【〈一人〉〈一人〉】《名》各人。めいめい。ひとりびとり。〔副詞的にも使う〕

③見坊豪紀〔主幹〕他編 (1982)『三省堂国語辞典　第三版』(東京，三省堂)

ひとりひとり【一人一人】(名) おおぜいのひとの，それぞれ。ひとりびとり。

④見坊豪紀〔主幹〕他編 (2002)『三省堂国語辞典　第五版』(東京，三省堂)

ひとりひとり【一人 (一人)】(名) 大ぜいのひとの，それぞれ。ひとりびとり。

⑤大野晋・浜西正人著 (昭和60年；1985)『類語国語辞典』(東京，角川書店)

ひとりひとり【一人一人】これは— の責任である。— 顔かたちが違う。各自。「ひとりびとり」とも。

⑥金田一京助・佐伯梅友他編 (1987)『新選国語辞典　第六版』(東京，小学館)

ひとりひとり【一人一人】＝ひとりびとり 名 ①ひとりずつ。「— 呼び出す」②各人。めいめい。「— の覚悟」

⑦金田一京助他編／山田忠雄〔主幹〕(1991)『新明解国語辞典　第四版』(東京，三省堂)

ひとりひとり【一人一人】(副) ①めいめい。各人。②順にひとりずつ。ひとりびとり。

⑧金田一京助・佐伯梅友他編 (1994)『新選国語辞典　第七版』(東京，小学館)

ひとりひとり【一人一人】＝ひとりびとり 名 ①ひとりずつ。「— 呼び出す」②各人。めいめい。「— の覚悟」

⑨松村明・三省堂編修所 (1995)『大辞林　第二版』(東京，三省堂)

ひとりひとり【《一人》《一人》】(「ひとりびとり」とも) ①めいめい。各人。「— の心掛けが大切だ」②どちらかひとり。だれかひとり。「思ふどち — が恋ひ死なば誰によそへて藤衣着む／古今恋三」

⑩松村明監修・小学館『大辞泉』編集部 (1995)『大辞泉』(東京，小学館)

ひとりひとり【一人一人】(「ひとりびとり」とも) ①多くの中のそれぞれの人。めいめい。各人。副詞的にも用いる。「— の自覚が大切だ」「— 診察する」②どちらかひとり。だれかひとり。「思ひ定めて — に逢ひ奉り給ひね」〈竹取〉

(7)「ひとりひとり (一人一人)」とするもの

①日本放送協会編 (昭和56年；1981)『NHK 編　新用字用語辞典』(東京，日本放送協会)

ひとりひとり〈一人一人〉

＊〈　〉を付けた語はかな書きを原則とするが，場合によっては〈　　〉の中の漢字で書いてもよい語である。

②藤原与一他編 (昭和60年；1985)『表現類語辞典』(東京，東京堂出版)

ひとりひとり　一人一人〔副・名〕〈めいめい〉とほとんど同義。一人ずつ。「一人一人名前を呼びあげる。」

③田 忠魁 他編著（1998）『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』（東京，研究社出版）

一人一人（ひとりひとり）は名詞・副詞。「分からないところを一人一人に聞いて回る・一人一人別々のものをプレゼントする・一人一人（が）責任を持って仕事をする」など，一人の例外もなく順々に・独立した個人別々に・めいめいといった意味を表す。

「一人ずつ」は「一人ずつ（順に）お入り下さい・一人ずつ一列に並ぶ・この仕事は一人ずつに割り当てる」など，（順番に）何かをするときの人数（単位）が一人であることを表す。「ずつ」は副助詞。

④柴田武・山田進編（2002）『類語大辞典』（東京，講談社）

【一人一人　ひとりひとり】それぞれの人。「～の胸に，その夏の思い出は刻まれた」「～の小さな気配りが，住みよい町をつくる」

(8)「ひとりひとり」を採録していないもの

①旺文社編／守随憲治・今泉忠義監修（1970）『旺文社　国語辞典』（東京，旺文社）

②西尾実他編（1971）『岩波国語辞典　第２版』（東京，岩波書店）

③西尾実他編（1986）『岩波国語辞典　第４版』（東京，岩波書店）

④松村明監修（昭和48年；1973）『用字用語　新表記辞典』（東京，第一法規出版）

以上の調査結果から，次のようなことが言える。

ⅰ．漢字の表記法は「一人一人」だけであるが，「人」を「り」と読むのは，当用漢字表では音訓外発音だったので，公用文では「一人」という表記を使用できない時期があった。

ⅱ．古語の意味は元来「どちらか一人・だれか一人」であったと思われるが，明治期以降には「ひとりずつ・ひとりごとに・各人」の意味が一般的となった。

ⅲ．発音は，古くは「ひとりびとり」であったが，次第に「ひとりひとり」が主流になり，現代語としてはもっぱら「ひとりひとり」と読む。『広辞苑』第六版（2008年刊行）はなお「ひとりびとり」を採用しているが，「ヒトリヒトリとも」と補注している。

ⅲ．品詞としては，古くは名詞とするものが多かったが，副詞とするものもあり，その両用が認められる。

ⅳ．「ひとりひとり」を用語として採録していない辞典もある。

2-2.「一人ひとり」という表記の流行と現状

「ひとりひとり」の表記法について注目すべきは，上記のインターネット情報によれば，少なくとも2006年の段階までは，「一人ひとり」という表記の使用頻度が最も高かったということである。この段階では，「一人一人」という表記と数的には拮抗しているが，筆者の主観的印象では，それ以前はもっと「一人ひとり」の表記が多かったと考えている。少なくとも「８

割程度を占めている」というのが，10年ほど前に抱いていた筆者の印象である。インターネットにも「会社で『ひとりひとり』という言葉を使った時に上司にそれは『一人ひとり』と書くのが正しい。常識だ。小説や新聞ではそうなっていると注意を受けました。果たしてそうなのでしょうか」（質問日時：2007／1／5）という質問がなされ，それに対する回答に，「『ひとりひとり』の書き方も，以前の指導要領では『一人ひとり』が正しいからそうするようにと教えていた時期がありました」というものがある。また，「昔いた会社でこの『一人ひとり』という表記を仕込まれました」というコメントも見られるので，「『一人ひとり』が正しい」と認識されていた時期があったことは確かである。ところが，インターネット上で「本当にそれが正しいのか」という質問が出てくる頃には，次第に「一人一人」の表記が勢いを挽回しつつあり，それにつれて，なぜ「一人ひとり」という表記があるのか，ということへの疑問も起こるようになったと考えられる。そして，現在の日本社会の大勢としては，「どちらでもいい」という考え方に傾いており，そのような回答がインターネット上ではベストアンサーとされている。

2-3.「一人ひとり」という表記の理由について

「一人ひとり」と書く理由は何か，という質問に対する回答として，インターネット上では，次のような回答が見られる。

①「一人一人」よりも「一人ひとり」のほうが見た感じが美しい。

②「漢字と平仮名の散りばめ方のバランス」という点で便利である。

③校正の本に「一人ひとり」と記述されている。

④古来より縦書きの日本語では，同じ字を続けて使うことはなく，繰り返し符号（々，ゝ，ゞなど）を用いてきたが，戦後「現代仮名遣い」が定められ，「々」（漢字返し）を除いて他の繰り返し符号は使わないほうが望ましいとされた。しかし，永年の慣習から，二文字以上の漢字を繰り返して使うことへの違和感があるために，「一人ひとり」の表記が自然に生まれた。

⑤平成元年（1989年）頃，「個を生かす」教育を重視するようになった，当時の文部省が「一人ひとり」と表現したことから始まった。この場合，「一人ひとり」の表記には，①「一人」を「いちにん」と区別させる。②「ひとりひとり」では，長くなってしまりがない。③「一人ひとり」と表現したほうが，「個を生かす」という視点にマッチしている。

2-4.「一人ひとり」と「一人一人」

インターネットに見られるデータ〈http://okwave.jp/qa/q2341564.html〉（投稿日時2006/08/17）によれば，特に新聞関係の用字用語類において，「一人一人」と「一人ひとり」との意味を使い分けている場合がある。

①時事通信『用字用語ブック』（4版）　ひとりひとり

＝一人ひとり〈各人〉～　一人ひとりの個性を生かす

＝一人一人〈人数〉～　一人一人呼び出す

②共同通信『記者ハンドブック』（9版）　ひとりひとり

一人一人〔人数〕　一人一人呼び出す

一人ひとり〔各人〕　一人ひとりの個性を生かす

しかし，そのような分け方をしない場合もある。

③共同通信『記者ハンドブック』（10版）

ひとりひとり・ひとりびとり

一人一人　　一人一人呼び出す，一人一人の個性を生かす

④朝日新聞『朝日新聞の用語の手引』（'05-'06年版）（'81年版，'97年版，'02年版も同様）

ひとり

＝（慣）一人〔人数に重点〕　一人勝ち，一人口は食えない，一人芝居，一人旅，一人（っ）子，一人天下，一人ひとり〈または一人一人〉，一人舞台，一人息子，一人娘

なお，『文部省 用字用語例』（昭和56年12月）には，

ひとり　一人　一人の力，一人っ子，一人一人

とあり，「一人一人」という表記だけが挙げられている。

「一人ひとり」と「一人一人」の意味を使い分けるというのは，合理性があるようにも思われるが，現実には非常に煩瑣である。よほどの達人か専門家でなければ，そのようなことを日常的に意識するのは困難である。また，それを使い分けることからくる利便性や修辞的効果もさほど期待できるわけではない。恐らく，そのような理由もあって，そのような使い分けは，今までのところ人口に膾炙していない。

2-5.「ひとりひとり」と「ひとりびとり」（連濁の問題）

上記の，共同通信『記者ハンドブック』（10版）では，「ひとりひとり・ひとりびとり」の二つの読み方が示されている。この二つの読み方について，インターネット上の，ある回答者は，

「ひとりひとり」「ひとりびとり」でいいのです。小説などでは「一人ひとり」「一人びとり」と書くことが多いようです。例えば，「暮れぐれ」「時どき」のように。ものの本によれば，前の字が読めないときに便利なようにですって？

〈http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1410416914〉

（回答日時2007/1/5）

と解説している。

ここに紹介されている「一人びとり」の表記は，一般的ではないが，小説などで用いられることがあるということである。つまり，「ひとりひとり」の代わりに「一人ひとり」と書き，「ひとりびとり」の代わりに「一人びとり」と書くということになる。もし，そうであるならば，「一

人ひとり」と書く理由は,「ひとりびとり」ではなく「ひとりひとり」と読ませたいからであり,「一人びとり」と書く理由も,同じく,それを「ひとりびとり」と読ませたいからであるということにならないであろうか。つまり,読み分けの必要上から,「一人ひとり」の表記が発生したのではないか,と考えられるのである。

ところが,最近の日本では,「ひとりびとり」という訓読みはほとんど用いられていない。つまり,本来は,「同一語を反復する熟語」(畳語)の一種である「一人一人」は,連濁の法則に従って,「ひとりびとり」と発音すべきであるにもかかわらず,その法則が適用されなくなっている。連濁の法則によれば,「和語(訓読みする語)の複合語であって,その後続部分に濁音が含まれない場合,後続部分の最初の音が濁音になる」はずである。「ひとりひとり」の場合にも,後続部分の「ひ」「と」「り」がすべて清音であるから,その最初の音である「ひ」が濁音化して,「ひとりびとり」となるのが日本語古来の慣習に従った発音である。この点から言えば,「一人びとり」という表記こそが,むしろ正しいのではないかと思われる。例えば,現代語でも,「はればれ」(晴れ晴れ)「ちりじり」(散り散り)「たえだえ」(絶え絶え)「ひろびろ」(広々)「くろぐろ」(黒々)「かわるがわる」(代わる代わる)「ところどころ」(所々)「はなればなれ」(離れ離れ)などの用例があり,「ところどころ」については「所どころ」と表記されることがあり,「はなればなれ」についても「離ればなれ」と表記されることがある。

しかしながら,同じく濁音の法則に,「前の部分と後ろの部分とが対等の関係で結ばれる複合語の場合には連濁が起こらない」という説がある。例えば,「山川」の,山と川が対等の関係で結ばれている場合は「やまかわ」(山と川)と発音し,「山にある川」の意味である場合は「やまがわ」と発音する。この法則で考えてみると,「一人一人」の場合も,前と後ろの各人が対等の関係にあるならば「ひとりひとり」と発音し,「ひとりずつ」のような意味で,前から後ろへと連接する関係にある場合には「ひとりびとり」と発音する,というような説明が成り立つかもしれない。ところが,そのような使い分けの意識がうかがわれるような説明は,国語辞典類にはほとんど見当たらない。かろうじて,上田萬年・松井簡治著(昭和27年;1952)『修訂 大日本國語辭典 新装版』(東京,冨山房)に,

ひとり ひとり 一人一人 どちらか一人。何れかひとり。竹取物語「思ひ定めて,ひとりひとりにあひ奉り給ひね」古今[illegible]「思ふどちひとりひとりが戀ひ死なば,誰によそへて藤衣きん」

ひとりびとり 一人一人(副)ひとりごと。ひとりづつ。各人

という記載が見られる。これによれば,「ひとりひとり」という場合は,「(二人のうちの)どちらか一人」という意味であり,「ひとりびとり」という場合は,「ひとりごとに,ひとりづつ,各人」の意味であるという。ここで「ひとりひとり」と読む場合は,対等の関係にある者の中から「どちらか一人」というのであるから,濁音化しないという説明が妥当する(ただし,大槻文彦『新訂大言海』では,竹取物語の用例は「どちらか一人」ではなく「ひとりごとに」の

意味とされている)。これに対して,「ひとりごとに，ひとりづつ，各人」について言えば,「ひとりごとに，ひとりづつ」の意味の場合は「ひとりびとり」が妥当するとしても,「各人」(めいめい）の意味の場合は,「一人」と「一人」が対等の関係に立つこともありうるから，必ずしも常に「ひとりびとり」ではなく,「ひとりひとり」という読み方が妥当する場合もあるとしなければならない。

ともあれ現実には,「ひとりひとり」と「ひとりびとり」とを使い分けることはなく，古くは「ひとりびとり」と発音していたが，最近は「ひとりひとり」と発音するようになった，という程度の説明しかできない状況にある。

2-6.「ひとりびとり」から「ひとりひとり」へ

上に掲げた古語・国語辞典類（上記の上田萬年・松井簡治著『修訂　大日本國語辭典　新装版』を除く）の調査結果によれば，最初「一人一人」は「どちらか一人・だれか一人」の意味であり,「ひとりびとり」と発音した。しかし，現代語では，同じく「ひとりびとり」の発音で「ひとりずつ，ひとりごとに，各人，めいめい」を意味するようになる。そこで，国語辞典類では,「ひとりびとり」の発音で,「どちらか一人・だれか一人」と「ひとりずつ，ひとりごとに，各人，めいめい」の両方の意味を記載するものが現れてくる。そして，文語的には「ひとりびとり」の発音が正しいとされながら口語的には「ひとりひとり」の発音が一般化してくるが，それは，昭和30年（1955年）頃以降であろうと思われる。「ひとりひとり」という読み方は，筆者が調査した辞書では，時枝誠記編著（昭和31年；1956)『例解国語辞典』(東京，中教出版株式会社）に初めて，次のように記載されている。

ひとりひとり【一人一人】(体) ①めいめい。各人。「― がしっかりやれば全体もよくなる」「これは―の責任だ」②順に一人ずつ。「― 名前を呼び上げる」「― に手渡しする」

ひとりびとり【一人一人】(体) →ひとりひとり【一人一人】

この辞典では,「ひとりびとり」を「ひとりひとり」と同一と見なして,「ひとりひとり」の項目を見よ，と指示しているのである。しかし，その後も多くの国語辞典類では,「ひとりびとり」の読み方が採用され，昭和55年（1980年）頃から,「『ひとりひとり』とも読む」というような記述が多く見られるようになる。そして，ほとんど同じ頃から,「ひとりひとり」の発音を採用しておいて「『ひとりびとり』でも可」とする辞典類も多く見られるようになる。

「一人ひとり」の表記が市民権を得た経緯については，インターネット上に，次のような解説が見られる。

> 昭和23年の内閣告示「当用漢字音訓表」では,「ひとり」を「一人」と漢字で書くことができませんでした。そこで，昭和25年の『文部省刊行物表記の基準』及び昭和28年の「文部省用字用語例」では「ひとり」と仮名で書くようになっていました。ところが，昭和48年に改定された「当用漢字音訓表」の付表によって「一人」と書けるようになりました。

（ただし，新聞では，昭和35年から『新聞用語集』によって，既に「一人」と漢字で書くことも認めていました。）

これは昭和56年の内閣告示「常用漢字表」にも受け継がれました。これによって，現行の「文部省用字用語例」では，「ひとりひとり」は「一人一人」と漢字で書くことになっています。一方，『新聞用語集』（日本新聞協会，昭和56年）には，「ひとり」の項に，「一人ひとり」の例が見え，実際の新聞でも用いられています。新聞関係のこのような「一人ひとり」の書き方は，昭和48年の音訓表改定以来のもので，それまで，「ひとり」と書くことが公用文・教科書では定着していたこと，「一人一人」とすると，前後に漢字がきた場合，漢字ばかりが続く感じになることなどが配慮されたものと思われます。ただし，新聞関係でも，共同通信社の『新・記者ハンドブック』（昭和50）では，「一人一人，一人びとり」を載せ，両様の表記を採っています。

この言葉は，「いちにんいちにん」と読まれることはないので，公用文のように，「一人一人」と書くのがよいが，「一人ひとり」「ひとりひとり」の書き方も認めています。

〈http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1178002906〉

（回答日時2011/12/24）

これによれば，昭和48年の当用漢字音訓表改定以後に，「一人ひとり」の表記が新聞関係に用いられるようになり，昭和56年の日本新聞協会『新聞用語集』には，その用例が挙げられている。また，その時流のなかで，教育界でも一般企業でも「一人ひとり」を採用するようになったと考えられる。しかし，ここ10年ほどの間に，形勢は変化してきている。「一人ひとり」と「一人一人」との間には「意味の違いも，発音の違いもない」と受け止められるようになってきたために，「一人ひとり」と書くのは，「ただ個人の趣味のレベル」とされ，「公的には望ましくない表記」と考えられるようになってきているからである。

他方，「一人一人」に「ひとりひとり」の読み方だけを挙げる辞典類は，未だに非常に少ないが，1981年に，『NHK 編　新用字用語辞典』（東京，日本放送協会）に「ひとりひとり〈一人一人〉」と記載されて，漢字で書く場合には「一人一人」を用いることが示唆され，また，最新の「文部科学省 用字用語例」（平成22.3）では，「常用漢字表」の音訓に従って，「一人一人」と書くように定められた。そこで，公用文（国や地方公共団体の文書）においても，この書き方に準拠する傾向が生じてきている。例えば，静岡県の「文書事務の手引き」には，「一人ひとり」は×とされ，「一人一人」と書くように規定されている。このような状況を受けて，最近，急激に「一人一人」という表記が広がりだし，逆に「一人ひとり」は劣勢になりつつある。同時に，「ひとりびとり」という発音も，人々の口にのぼることが激減し，もし若い人がその発音を聞けば，違和感を覚えるのが当然という時勢になってきている。

例えば，昨年（2011年）の東日本大震災直後に，天皇陛下が被災者と国民に向けてのビデオメッセージの中で「国民，ひとりびとりが・・・」と述べられたことを取り上げて，「『ひとり

ひとり」ではなく，『ひとりびとり』が本当は正しいのでしょうか？　天皇陛下が間違えるとは思えないし，気になります」（質問日時2012／1／12）という投稿がインターネットに掲載されている。同じく，「一人びとり？一人ひとりじゃなくて？　でも，字幕も一人びとりになっている・・・これって皇室専用の言葉なのか？」という投稿も見られる。

今でも文語的には「ひとりびとり」という読み方が正しいという意識があり，口語的には「ひとりひとり」が常識化しているという，ある意味の世代的ギャップの中で，上のような若者たちの疑問が発生していると言えるであろう。

3. まとめ

3-1. 現代の用例

「ひとりひとり」の表記について，筆者が2012年４～５月の『南日本新聞』『朝日新聞』の二誌を調査したところ，次のような結果が得られた。

(1) 一人一人

・一人一人の顔が思い浮かぶ
・一人一人の意識を変えよう
・免許を取ろうとする一人一人に対して
・学生一人一人が花を咲かせる
・一人一人に花を手渡す
・一人一人の打者に向き合う
・生徒一人一人がアイデアを出す
・一人一人名前を呼ばれる
・一人一人を幸せにする
・団員一人一人が自覚を持つ
・一人一人が自分の心を清らかにする
・一人一人のプロ意識が問われる
・一人一人が全力を尽くす
・一人一人がルールを守る
・一人一人前に出てくる
・保護者一人一人が高い意識を持つ
・部員一人一人が考える
・お客さん一人一人ゆっくり過ごせる
・私たち一人一人が自然を大事にする
・一人一人に対する配慮が大切だ

・一人一人面談する
・一人一人細かい指導ができる
・スタッフ一人一人の健康を話し合う
・一人一人に手渡す応援歌
・社会の一人一人が他者への関心を持つ

(2) 一人ひとり
・一人ひとりの命を大事にする
・一人ひとりの力は微力でも
・私たち一人ひとりが憲法を守る
・一人ひとりとじっくり触れ合う
・接客する時間が一人ひとり長い
・市長の気持ちを一人ひとりが理解する
・一人ひとりと握手する
・原点に一人ひとりの人間の感性がある
・症状は一人ひとり違っている
・一人ひとりの負担は少ない
・一人ひとりが株主という自覚を持つ

(3) ひとりひとり
・僕たちひとりひとりに求められている
・ひとりひとりの心に歌をとどける

以上のように,「一人一人」が最も多く,「一人ひとり」はその半分にも達しない。「ひとりひとり」となると,ほとんど例外的にしか使用されていない。なお,「一人一人」には「一人ずつ」と「各人」との意味の両方が含まれているが,「一人ひとり」には「各人(独立した個人ごとに)」という意味の用法だけが見られる。

3-2. 結論

「ひとつひとつ」も「ひとりひとり」も,古くは連濁の法則に従って「ひとつびとつ」「ひとりびとり」と発音していた。その発音は今でも伝統文化的な用法として保持されている。しかし,現代の口語としては「ひとつひとつ」「ひとりひとり」が常識となっており,そこには文語と口語とをめぐる世代間ギャップが認められる。

漢字と平仮名を交ぜる表記法は近年増加する傾向にあり,それに伴って「一つひとつ」「一人ひとり」という表記も生まれ,特に「一人ひとり」は「個性重視」という教育的意義を帯びるものとされて,一時期大いに流行した。しかし,「一人一人」と「一人ひとり」とを意味の違いで使い分けるということは一般化することなく,現在では,「どちらも同じ」とする考え

方が普通になっている。

伝統的な発音である「ひとつびとつ」「ひとりびとり」を尊重して，それを漢字と平仮名を交ぜた表記にすれば，「一つびとつ」「一人びとり」ということになるが，その表記は一部の近代小説を除けばほとんど使用されることはなかった。その理由は，漢字と平仮名を交ぜて表記するようになる時期に合わせて，発音が「ひとつひとつ」「ひとりひとり」に変化したためであろうと思われる。漢字と平仮名で表記しようとする頃には，「ひとつひとつ」「ひとりひとり」という発音が一般化していたので，「一つひとつ」「一人ひとり」という表記が用いられるようになったと思われる。また，「一つひとつ」「一人ひとり」という表記には，「ひとつびとつ」「ひとりびとり」ではなく，「ひとつひとつ」「ひとりひとり」と発音することを強調する狙いから，敢えて「一つびとつ」「一人びとり」と区別するため，という意識が働いていた可能性が高い。

古語において「ひとつびとつ」「ひとりびとり」と発音した理由は，連濁の法則によるものであったが，現在では，「ひとつひとつ」「ひとりひとり」と清音で発音するのが常識化している。その理由としては，両者ともに，二つの単語が連接した熟語としてではなく，互いに独立した二つの単語を並べただけの並列語として意識されたためということが考えられる。「ひとつひとつ」は互いに別の「一つ」を二つ並べているのであるから，それぞれを「ひとつ」と発音する。同じく，「ひとりひとり」は互いに独立の「一人」を二つ並べているのであるから，それぞれを「ひとり」と発音するというような意識が，暗黙の裡に社会全体に浸透した結果，濁音をふくむことのない発音が一般化したのではないかと思われる。

しかし，特定の発音や表記を用いる理由のいずれも根拠として強固なものではなく，また，どれかを固守するだけのメリットもさほど期待できない状況のなかで，発音としては「ひとつひとつ」「ひとりひとり」に統一し，表記としては「一つ一つ」「一人一人」に統一しようとする傾向が次第に強くなりつつある。